

「他なる空間」のあわいに：
ミシェル・フーコーの「ヘテロトピア」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 政洋 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180105-070

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	「他なる空間」のあわいに：ミシェル・フーコーの「ヘテロトピア」をめぐって
Author	加藤, 政洋
Citation	空間・社会・地理思想. 3 卷, p.1-17.
Issue Date	1998
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	
DOI	10.24544/ocu.20180105-070

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

「他なる空間」のあわいに

——ミシェル・フーコーの「ヘテロトピア」をめぐる——

加藤 政洋*

I

ポストモダンの潮流のなかで、きわめてラディカルにそしてクリティカルに展開された「空間」の「(再)主張」は、近年の人文地理学におけるさまざまな議論の焦点となってきた。とくにここ数年の間に、David Harvey や Edward Soja をはじめとする多くの「社会的空間の新しい理論家たち」(Genocchio, 1995, p. 36) が¹⁾、空間とは社会的に生産されたものであることを強調するなかで、「ヘテロトピア heterotopia」という差異の場からなる(差異化された)社会的空間——売春宿、監獄、アサイラムなど——について論じたミシェル・フーコーの比較的マイナーな研究(Foucault, 1986)がますます注目を集めるようになってきた。その理由は、フーコーがみ出したヘテロトピアというこの造語が、われわれがいま生きている場所とは「(異)他なる場所」の潜在性を指し示しているからであり、また「われわれのますます監視され、分割され、模倣される社会—空間秩序への『抵抗』の形態を内在する社会的に構築された反—場の可能性」(Genocchio, 1995, p. 36; 強調は引用者)を記述するのにきわめて有用な概念だからである。

ヘテロトピアという概念は、地理学では、Soja の言及 (Soja, 1989, pp. 16-21) をきっかけとして多くの論文で引用されてきたわけであるが、「理論的急場しのぎ」(Genocchio, 1995, p. 36) と揶揄されるように、基本的なテキスト批判がなされないままに多様な読みが展開されている。ヘテロトピアはきわめて問題含みな概念であるし、フーコー自身もそれに関する体系的・

整合的な「原則」を提示しているわけではないので、後述する地理学におけるヘテロトピアを引用する際の典拠の混乱、多様な「読み」や短絡的な「流用」がみられることはえて仕方のないことかもしれないが、逆にそれらの論点を整理すればヘテロトピア概念のはらむ問題を浮かび上がらせることができるとおもわれる。そこで本稿では²⁾、最近の人文地理学におけるヘテロトピアの解釈と適用の現状を把握し、その問題点を批判的に検討しながら、ヘテロトピアの新たな可能性についても探究することにした。

以下では、まずヘテロトピアの基本的な位置づけをフーコー自身の説明に拠りながらユートピアとの対照で提示する(Ⅱ)。そのうえで、フーコーが簡潔にまとめたヘテロトピアを記述するための原則——ヘテロトロジー——を紹介する(Ⅲ)。そしてここまでのフーコー自身によるヘテロトピアの位置づけをふまえて、地理学における解釈およびその適用のあり方を検討する。ここでは、Soja や Relph らを中心としたポストモダンにヘテロトピアを結びつける論点と、Harvey が主張するような「抵抗」や「自由」の可能性をはらんだ社会的空間の潜在性に注目する論点とに分けて整理する(Ⅳ)。ここから筆者自身がヘテロトピアの要諦と考える論点を導き出し、再度フーコー自身の主張に結びつけて、場所の異種混濁性に重きをおくヘテロトピア論ではなく、ジル・ドゥルーズやアンリ・ルフェーブの主張との関連から「他なる」空間の可能性を議論し、稿を閉じることとしたい(Ⅴ)。

しかし、本論にはいる前に、フーコーの問題領域の系譜における「ヘテロトピア」の位置を確認しておく必要があるだろう。フーコーが物質的な空間の重要性について明示的に言及したのは、きわめてささやかな

* 大阪市立大学・院

かたちではあるが「空間・地理学・権力」(1976=1988)、「権力の眼——『パノプティック』について」(1977=1978a)、そして「空間・知そして権力」(1982=1984a)という一連のインタビュー・対談においてであった。しかし、Soja (1989, p. 15)によれば、これらの諸論にさきだつ「画期的考察」としてあげられるのが、1967年3月14日に行われた建築家との研究会における「*Des espaces autres*」と題されたレクチャーであるという。それはフーコーが亡くなった1984年の10月にフランスの『*Architecture - Mouvement - Continuite*』誌に同名で掲載され (pp. 46-49)、1986年に『*Diacritics*』誌 spring 号の TEXT/CONTEXT というセクションに「Of Other Spaces」(pp. 22-27)として Jay Miskowiec によって英訳された6ページばかりの小論である³⁾。およそ20年近くも省みられることのないこの稿のなかに、近年の人文地理学において注目を集めているヘテロトピアに関する論考が構成されている。

だが、なぜフーコーは当時、建築家との研究会に参加し、「空間」論をレクチャーしたのであろうか。詳細はさだかではないが、『臨床医学の誕生』(1963=1969)の序で、この本が「空間・ランゲージュ・死」に関するものであることを述べていたこと (p. 1)、さらに、同年に著された『レーモン・ルーセル』(1963=1975)や「距たり・アスペクト・起源」(1963=1990b)、そして「空間の言語」(1964=1990c)において、あるいはフィリップ・ソレルスらと密接にかかわりあうなかで、「言語とは空間的事象である」(フーコー, 1990c, p. 121)という認識を強め、言語学的な主体論についても空間的に思考していた時期であることなどがその理由と考えられる。

「ニーチェ・フロイト・マルクス」(1964=1984b)における思想が結実されるかたちで『言葉と物』(1974)が1966年に発表されており、そのはしがきで「ヘテロトピア」という造語が生みだされたわけであるが、ここには「距たり・アスペクト・起源」や「空間の言語」で展開された言語空間論のとり込みを容易に見てとることができる。フーコーはこの年の10月にチュニジアのチュニス大学に移っているが、建築家との研究会は『言葉と物』の出版以降に開始されていたものと思われる。それゆえ、「*Des espaces autres*」の構成は『言葉と物』に強く規定されており、また一連の言語

空間論の成果を「現実」の場や空間を論じるためにふんだんに取り入れたと考えられるのである。とくに注目すべきは、「距たり・アスペクト・起源」のなかでソレルスの『公園』に関して、フーコーが、その冒頭に掲げられたジャン=ジャック・ルソーの「公園——それは、非常に美しく、まさに絵のような場所の組み合わせで、ひとつひとつの景観はそれぞれ異なる国からえらびとられており、取り合わせを除けば、すべてが自然に思える、そういった場所を意味する」(p. 44)という定義をひきつつ次のように述べている点である。

この環境は、もちろん、鏡を思わせる、——物に、それらの物の外にある、移し植えられた空間を与え、同一性を増加させ、差異の数々を何ひとつもほどくことのできない、触知しがたい絆のうちに混じり合わせる鏡を。まさしくあの『公園』の定義を思い出していただきたい、「実に美しく、実に絵のような数々の場所の混成物」——それらの場所の一つ一つがそれぞれ異なった風景からとり出され、その生まれた場所の外にずらされ、それ自体をというかほとんどそれ自体をこの配置の中に移し置かれたのだが、そこでは「すべてが自然に見える、集合それ自体を除いては」。公園、すなわち相容れがたい諸質量の鏡、鏡、すなわち相隔つた木々が交錯しあう公園。これらの二つの暫定的な形象のもとに開かれつつあるのが、成立困難な(その軽やかさにもかかわらず)空間、規則的な(表面上は正当性を欠くと見えながら)空間なのだ。

(フーコー, 1990b, p. 83)

この「公園」の定義を鏡としてイメージすることが、ヘテロトピア概念への導入となっている。1960年代前半のフーコーは、多くの文学論をてがけるなかで、「鏡の空間」で反復する「同一性」と「差異」という言語の空間的「二重化」(『レーモン・ルーセル』、「外の思考」、あるいは「自己(の同一性) / 同一者」と「他者」(「アクタイオンの散文」、「距たり・アスペクト・起源」、『言葉と物』)、さらには中世のエピステーメにおける言語を「世界の鏡」ととらえるなど(『言葉と物』)、さまざまなかたちで「鏡」を思考のデヴァイスにしており、これらの論考のなかでねりあげられた空間思想が「ヘテロトポロジー」の素地になっていると考えられるのである。

II

フーコーは「Of Other Spaces」を、「19世紀の主要な固定=脅迫観念は、ご存じのように、歴史である」と位置づけながらも、それと対照をなすようにつぎのように断言することからはじめている。

現代とは結局のところ空間の時代なのかもしれない。われわれは同時性の時代にいる。つまり、並列の時代、近さと遠さの、横並びの、そして分散した状態の時代にわれわれはいるのだ。わたしの考えではわれわれの今、世界に関する体験が時間をつうじて発展する長い人生のそれであるよりは、点や交差を自身のもつれと結びあわせる編み目のそれであるという時代にある。今日の論争をにぎわしている特定のイデオロギー的闘争が時間の敬虔な世襲や空間の限定した住人に反対している、とも言えるだろう。構造主義は、少なくともそれはこのいささかあまりに一般的な名称のもとに分類されてはいるが、実際のところ、構造主義は時間の否定を含意しない。つまり、それは、われわれが時間と呼ぶもの、そしてわれわれが歴史と呼ぶものを論じるのにある特定のマナーを含んでいるのだ。

(Foucault, 1986, p. 22)

「空間、それは死んで硬直したもの、弁証法的でもなく、動かざるもの。反対に時間こそ、豊かで実り多く、生きいきとし、弁証法的なもの、という対比」(フーコー, 1988, p. 51) をひっくり返すようなはじまりのなかで、「他なる空間」への思索の舞台が整えられてゆく。

「今日われわれの関心、われわれの理論、われわれのシステムの地平を形成しているとおもわれる空間はひとつのイノヴェーションではない、ということに気づく必要がある。つまり、空間それ自体が西洋的経験において歴史をもっているものであり、時間の空間との決定的な交差を無視することはできない」。かれはこの空間の歴史を「きわめてラフに」中世から現在までたどる。中世の空間、それは、「階層的な場所のアンサンブル」(聖なる場所/不敬な場所、護られた場所/開かれ晒された場所、都市的場所/農村的場所)からなる空間(=「すえつけの空間」)である。これに続くのが、17世紀にガリレオによって開かれた無限に広がる「拡張」の空間。そして現在は、場 site が(「すえつけの空間」に代わってきた)「拡張」の空間に(さらに)代わってきた。この場は「諸点あるいは諸要素間の近接関係によって規定される」。われわれは形式的にそうした諸関係を「民衆学の観点」(人間の場/

居住空間)からシリーズ/トゥリー/グリッドとして描くことができる。そして総括的に「われわれの時代とは、空間がわれわれに場所間の関係形態を賦与するそんな時代なのだ」と位置づけている。

またフーコーは、現代の空間が完全には非神聖化されておらず、われわれの生活・われわれの制度と実践がいまだに神聖なままであり、特定の対立(私的空間/公的空間、家族的空間/社会的空間、文化的空間/有用な空間、レジャーの空間/労働の空間)によって支配されていると考える。こうした空間を理解するためには、ガストン・バシュラールの「記念碑的研究」(『空間の詩学』)と「現象学者の記述」が基礎となる。それらは、われわれが均質なそして空虚な空間に生きているのではないことを明らかにした。つまり、われわれの空間はある質を有しておりわれわれは想像に満ちた空間を生きているのである。こうしたバシュラールらによって考察された「内的空間」を「時間の省察には基礎的である」と位置づけつつも、フーコーはそれとは対照をなす「外的空間」の探究へと向かう。あらゆる社会に見いだされる「外的空間」、かれはそれをつぎのように位置づけている。

われわれが生きる空間、われわれ自身からわれわれを引き出す空間。その空間のなかではわれわれの生活の浸食が起り、われわれの時間そしてわれわれの歴史が生起する。われわれを引っかきまわし悩ますその空間はまたそれ自体において異種混交的な空間である。言い換えれば、われわれは一種の空虚、つまり個人や事物を位置づけることのできる内側に生きているのではない。われわれは、反転した光の濃淡で色づけられる空虚の内側に生きているのではなく、相互に入れ替えることのできない、そして絶対に相互に重なることのできない場を描く関係の束の内側に生きているのだ。

(Foucault, 1986, p. 23)

例えば、街路、列車、カフェ、ビーチ、寝室、ベッドなどはそれぞれ形式的な関係の束として描くことができるが、フーコーが関心を寄せるのは「あらゆる他の場と関係しており、しかしそれらが偶然明示し、映しだし、あるいは反射する関係の束を疑い、中立化し、あるいはひっくり返してしまうほどの奇妙な特性をもった特定の場」であり、それは「いわば、あらゆる他の場と関係しながら、しかしあらゆる他の場と矛盾する」空間である。こうした空間のひとつがユートピア

であり、もうひとつがヘテロトピアであるという。

一般的に、ユートピアは「現実の場所」をもたない空想的な空間である。しかし、フーコーによれば、ユートピアもまた社会の「現実空間」の「まったくの類比」または「反転した類比」という関係にあり、それらは社会そのものを完全にしたかたちであるいは社会をさかさまにひっくり返して表象するものの、こうしたユートピアはやはり基本的には非現実的空間ではない。その一方でヘテロトピアは、「ひとつの文化に見いだすことのできるその他のあらゆる現実の場を表象すると同時に、異議申し立てをなし、そして転覆してしまうような」現実中存在する反一場のようなものと位置づけている。

こうしたユートピアとの対照で論じられる形式は、『言葉と物』の序でいくらか異なる文脈で現れていたことをわれわれに思い起こさせる。そこでは、ボルヘスが引用した中国のある百科事典を引用しており、すべての動物がつぎのようなカテゴリーに分類されている。「(a) 皇帝に属するもの、(b) 香の匂いを放つもの、(c) 飼いならされたもの、(d) 乳呑み豚、(e) 人魚、(f) お話に出てくるもの、(g) 放し飼いの犬、(h) この分類自体に含まれているもの、(i) 気違いのように騒ぐもの、(j) 算えきれぬもの、(k) 駱駝の毛のごく細の毛筆で描かれたもの、(l) その他、(m) いましがた壺をこわしたもの、(n) とおくから蠅のように見えるもの」(1974, p. 13)。フーコーは、この分類がわれわれに味わわせる異常さはわれわれが自明なものとする思考の「不可能性」を指し示すものだとし、このテキストからは「出会いの共通の空間そのものが、そこでは崩壊している」印象を受けるとする (pp. 13-14)。「不可能であるのは、物の隣接関係ではなく、物を隣りあわせることをゆるす座そのものなのだ」(pp. 14-15)。フーコーはこの根本的に比較不可能な言語空間の構造を「ヘテロトピア」と呼ぶのである。

ボルヘスのテキストは、ながいことわたしを笑わせたが、同時に、打ちがちがたい、まぎれもない当惑をおぼえさせずにはおかなかった。おそらくそれは、彼のテキストをたどりながら、『唐突なもの』や適合しないものの接近によって生ずる以上に、ひどい混乱があるのではないか、そんな疑惑が生まれたためだったろう。それは、おびただしい可能な秩序の諸断片を、法則も幾何学もない『異種混交のもの』の次元で、きらめかせる混乱とも言おうか。『異種混交のもの』という語を使ったが、

この場合、それを語源にもっとも近い意味で理解しなければならない。つまり、そこでは物は、じつに多様な座に「よこたえられ」「おかれ」「配置され」ているので、それらの物を収容しうるひとつの空間を見いだすことも、物それぞれのしたにある『共通の場所』を規定することも、ひとしく不可能だという意味である。『ユートピア』というものは人を慰めてくれる。つまり、それは実在の場所をもたぬとしても、ともかくも不思議な均質の空間に開花するからである。たとえそれに近づいていくということが幻想にすぎぬとしても、それは、ひろびろとした並木路のある街、植え込みのある庭園、安楽な国々をひらいてくれる。だが『ヘテロトピア』は不安をあたえずにはおかない。むしろ、それがひそかに言語をほりくずし、これ《と》あれを名づけることを妨げ、共通の名を砕き、もしくはもつれさせ、あらかじめ「統辞法」を崩壊させてしまうからだ。…ユートピアは、物語や言説を可能にし、言語の正当な線上、『ファブラ』の基本的次元にあることとなろう。他方、ヘテロトピアはことばを枯渇させ、語を語のうえにとどまらせ、文法のいかなる可能性に対しても根元から異議を申し立てる。こうして神話を解体し、文の抒情を不毛のものとするわけである。

(フーコー, 1974, p. 16)

ここには、「Of Other Spaces」におけるヘテロトピアの定義との奇妙な矛盾がある。『言葉と物』では、ヘテロトピアは「おびただしい可能な秩序の諸断片」からなる「不可能な」空間における共在（「多様な座」）として定義づけられている。不可能な空間、つまりそこには「共通の場所」を見いだすことはできないし、われわれの現実の世界にそれを実現することもできない。その一方で、「Of Other Spaces」では、「単一の現実の場所」にそれ自体では相容れないいくつかの空間を並置できる「異種混交の場」としてしている。この違いは、ふたつのテキストがまったくべつの対象に焦点をあてていることに起因しているのであろうか。つまり、「Of Other Spaces」ではあくまで現実の場所を考察しているのに対して、『言葉と物』は言説的・言語的な空間をとりあげているからである。しかしながら、『言葉と物』におけるあらゆるものが「多様な座」に定位される不可能な（言語）空間とは、われわれが自明視する（言語・社会）空間・体系を参照し、その意識を混乱させ「崩壊」させるような認識論的な「反一場」として規定することもできるのではないか。「Of Other Spaces」と共通する唯一の可能性があるとすれば、ここに求めるほかないとおもわれる（IVの後半部

分も参照)。ただし、そうした「不可能な」空間があった「ヘテロトピア」として認識され、名づけられ、引用・参照されてしまえば、その「多様な座」は解体され、自明な論理をふきこまれ解釈可能な空間として再構築されてしまうとおもわれる(Connor, 1989 も参照)。このことは、例えば、ポストモダンの状況にヘテロトピアをあてはめる論者たちが対峙すべき問題であろうが、フーコー自身の立場からすれば、ふたつのテキストに強弱の差はあれどちらも「外の思考」への問いを構成していると考えられるのである。後述するように、「他なる空間」もあくまで「外」の空間なのだから。

Ⅲ

フーコーは、不可能な空間ではなく、現実存在する異他なる空間、他なる場所を研究・分析・記述・解説するための記述=描写を「ヘテロトポロジー」と名づけ、体系的とはいえないがその原則を事例とともに6つに分けて提示している(Foucault, 1986, pp. 24-27)。

① すべての文化・人間集団は必ずヘテロトピアを構成しているが、それはきわめて多様な形態をとるために、普遍的な形態を見いだすことはできない。しかしながら、フーコーはその主なふたつのカテゴリーを提示する。ひとつは、社会的環境・人間的環境との関係で危機の状態にある諸個人(未熟な人、月経の女性、妊娠している女性、老人など)のための特権的な/聖なる/禁じられた場所であり、フーコーは(「原始社会」を想定しつつ)これを「危機のヘテロトピア」と呼ぶ。具体的には、若者が性的能力を最初に誇示するのは家ではなく「どこかほかの」場所でなされることが前提とされた19世紀の社会においては、全寮制学校や軍役がそのような役割を果たした。また、若い女性にとって「20世紀の半ばまで親譲りのテーマであったハネムーン」の伝統では、女性の処女を奪うことが「いまここで」なされたわけであり、そのコトがなされた瞬間の列車あるいはハネムーン・ホテルはまさにいまこの場所という「地理的目印のないヘテロトピア」だったのである。「われわれの社会には、その名残がいくつかまだ見いだせるのではあるが、こうした危機のヘテロトピアは消滅の一途をたどってきた」。

そして、もうひとつは、その危機のヘテロトピアにとって代わりつつある「逸脱のヘテロトピア」である。ここには、社会的な規範から逸脱した諸個人を収容する「保養所」、「精神病院」、そして言うまでもなく「監獄」が含まれる。またフーコーは、老年がひとつの危機であるとともに、われわれの社会では無為がある種の逸脱でもあるため、「養老院」を危機のヘテロトピアと逸脱のヘテロトピアの境界線に位置づけている。

②「社会はその歴史を展開するなかで、実存するヘテロトピアの機能をまったく違った型につくりあげる」。つまり、「それぞれのヘテロトピアには社会のなかで精密に決定された機能があり、そして同一のヘテロトピアは、それが生起する文化の同時性にしたがってそれぞれの機能をもつ」。例は、共同墓地という「奇妙なヘテロトピア」である。それは後期18世紀まで教会に接続して都市の中心に位置し、神聖な復活と魂の不滅に密接に関連していた。ところが後に、健康の改善と死の個人化を目的とした「ブルジョア的流用」で郊外へと移転され、各家族はその「他なる都市」に暗い保養地をもつにいたったのである。

③「ヘテロトピアは、それら自体では相容れないいくつかの空間、いくつかの場を単一の現実の場所に並置することができる」。これは矛盾した場の形態をとるヘテロトピアであり、フーコーはその(最古の)例を、オリエントの庭園にみとる。庭園は世界の全体性を象徴的に表象するようなヘテロトピアであり、ペルシア絨毯とはもともと庭園の複製であった。つまりは、「庭園はひとつの絨毯であり、そのうえで世界全体がその象徴的完成をなしとげ、またその絨毯は空間を横切って移動できるある種の庭園である」。

④ヘテロトピアはしばしば時間のスライスに結びつけられることで、「ヘテロクロニー」(=ヘテロトピアと相称される時間性)へと開かれる。また、そのヘテロクロニーと結びつくときにヘテロトピアは「能力全開で機能」することが可能になる。この点でも、共同墓地は異質なヘテロクロニーをはらんだヘテロトピア的な場所である。また「無期限に時間を蓄積」する博物館と図書館とは、「あらゆる時間・あらゆる時代・あらゆる形態・あらゆる嗜好をひとつの場所に囲い込」み、ひとつの空間のなかあらゆる時間を構成するヘテロトピアである。かれは、こうした思想全体がモダニティに属していると指摘する。

時間の蓄積と結びつくヘテロトピアとは正反対の、つまり、はかなく一時的で不安定な側面をもつ時間に結びつけられるヘテロトピアがある。完全に時間的〔chroniques〕な論理が支配するヘテロトピア、例えば、市やフェスティバルがそれに相当する。

また、フーコーは、「フェスティバルのヘテロトピアと時間を蓄積する永久のヘテロトピア」というふたつの形態が結びつけられた新しい時間的ヘテロトピアが最近創出されてきたことにもふれている。それは「原始的で永久にむき出しの状態のコンパクトな3週間を都市の居住者に提供」するヴァケーション村であり、その生活の再発見はわれわれの時間に対する観念を無効にすると同時に、そこでの経験は「時間の再発見」とまったく同じ効果をもつと指摘する。

⑤ ヘテロトピアは、それ自体を孤立させたりあるいはそれ自体のうちに入り込ませることを可能にする開閉システムを前提とする。一般的にヘテロトピア的な場は、出入りが（公共空間のように）自由というわけではない。兵舎や監獄のように強制的に収容される場合や、ムスリムの共同浴場のような宗教的浄化による制限、スカンジナビアのサウナのような衛生的浄化による制限などがあるからである。

さらに、入ること自体が幻想であるようなヘテロトピアもある。つまり、「われわれが入るといふまさにその事実によって、排除される」という事態。ここでフーコーは、ブラジルなどの大農場に存在した「ベッドルーム」を想定している。

入り口のドアは家族が生活する中央の部屋へは通じおらず、そしてやって来た個人または旅行者すべてに、このドアを開ける権利が、そのベッドルームに入る権利が、そして一晩そこで眠る権利があったのである。いまこれらのベッドルームにそうやって入ってきた諸個人は、けって家族の住む場所へはアクセスできなかった。つまり、その訪問者は通りがかりの絶対的なゲストであって、真に招かれたゲストではなかったのである。

この種のヘテロトピアもやはり消滅してきたわけだが、モーターヤデート・ホテルはその系譜に属している。つまり、ホテルには誰もが自由にアクセスできるのではあるが、そのホテルの部屋とそこでの（不義の）セックスは絶対的に隠され隔離されているからである。

⑥ ヘテロトピアはその他のあらゆる空間との関係で機能する。その役割はまず、現実の空間の内部に人間

生活を区分するあらゆる場を、よりいっそう幻想的に創り出すことにあり、これはすべての現実の空間を露わにする「幻想の空間」——例えば、売春宿——である。そしてさらなる役割は、「われわれの空間が、ちらかっていて、不完全なつくりであり、ごちゃ混ぜであるのおなじように、完全に、正確に、なおそのうえうまいこと整えられたものとして」の他なる空間を、つまりもうひとつの現実空間を創り出すことにある。これは幻想のヘテロトピアではなく、「代償のヘテロトピア」——例えば、コロニー——とされる。フーコーは代償のヘテロトピアの事例として、南米の「驚くべきイエズス会コロニー」をあげて、つぎのように描写している。

その集落は教会のもとに長方形の場所をめぐる厳密なフランにしたがって設計された。片側には学校があった。その反対側には、共同墓地があった。そして、教会の正面にはアヴェニューがべつのアヴェニューと右斜めに交差するように設けられていた。各家族はこのふたつの軸に沿った小さなキャビンをもっており、そこではキリストの記号が正確に再生産されていたことになる。キリスト教はアメリカ世界の空間と地理にその基本的な記号を印しづけているのだ。各個人の日々の生活は、ホイッスルによってではなく、ベルによって調整された。みんなが同じ時刻に起床し、みんなが同じ時刻に仕事を始めた。食事は正午と午後5時。それから就寝時間となり、そして真夜中には夫婦の目覚めと呼ばれる時間があり、それは教会の鐘の音で、各個人が彼女／彼への義務をつとめた。

これは、空間的にも時間的にも絶対的に調整・管理されたコロニーであり、そのなかで「人間的完成が効果的に達成され」ていたのである。

以上がヘテロトポロジーを構成する6つの原則である。あらゆる文化・社会に必ずヘテロトピアが構成されており、それは展開する歴史のなかでまったく違った機能を有するようになる、という普遍的な原則。ヘテロトピアは、相容れないいくつかの空間や場を単一の現実の場所に並置しそれらはつねに開閉システムを前提としながらその他のあらゆる空間との関係で機能する、そしてヘテロトピアの時間が存在する、という場の規定。ヘテロトピアは同一の形態をとらないとされるものの、この整合的とは言い難い6つの原則すべてを兼ね備えたヘテロトピアが実際に存在するとは考

えにくく、各項で挙げられたさまざまな事例にあてはまるような原則をそれぞれに付した感否めない。また、Soja (1995) が主張するように、それぞれの事例の近代化に関する研究がその後のフーコーのテーマになったということもできるのかもしれないが、ヘテロトポロジーの内容を鑑みればそれではあまりに一面的にすぎるとおもえるし、こうしたヘテロトピア的な場や原則からは、ヘテロトピアというフーコーの「思想」あるいは「構想」をうまくつかみ取ることができないのではないかと、むしろ、フーコーはヘテロトピア的な場所を掘り起こしながら、それぞれに該当する「他なる空間」の原則を構想したとは言えないだろうか。例えば、そうした営みは「無名の言説」を発掘する作業に似ている。フーコーは「汚名に塗れた人びとの生活」について、つぎのように述べていた。

あたかも実在しなかったような生活、それらを根絶する少なくとも消去することのみを意図した、ある権力との衝突によってしか生き延びはしなかった生活、多様な偶然の所産を通してしかわれわれのもとには帰来しない生活、これこそが汚名なのであって、私がここに採集しようとしたのは、そのわずかばかりの名残にすぎなかったのである。…これにはもとより伝統などなく、断絶・消滅・忘却・交差・再出現という、非連続的な行程を経てようやく、われわれのもとに到達しうるのである。最初から偶然がこれを支えているのである。

(フーコー, 1987, p. 83, 82)

そしてその「採集」の原則とは、「現実実在した人物が対象」でありかつかれらが「無名」であったこと、さらにかれらの「言葉および…生活の衝撃から、われわれに対してなお、美と恐怖の入り混じったある印象が生じていること」である (フーコー, 1987, p. 80)。つまり、フーコーは「奇妙な詩となった特異な生活」 (= 「汚名に塗れた人びとの生活」) を採集したように (1987, p. 78)、「奇妙な特性をもった特定の場」 (= 「他なる空間」) を採集したのである。それゆえ、「Of Other Spaces」と「汚名に塗れた人びとの生活」とは、ここではむしろ倫理を機軸にしてわれわれの主体性に対する問いを構成する生活や場の採集と考えることができるし、そうした「断絶・消滅・忘却・交差・再出現という、非連続的な行程を経てようやく、われわれのもとに到達した「奇妙な詩となった特異な生活」と「奇妙な特性をもった特定の場」とは、われわれの現在の

生活や現実空間を参照すると同時にそれらに対するわれわれの想像力をも喚起する、(フーコー流に言えば)「鏡」となっているようにおもっているのである。

フーコーは、「Of Other Spaces」をわれわれの想像力をヘテロトピアへといざなうつぎのような文章で締めくくっている。

ボートとは、それ自身によって存在する、場所なき場所、空間に浮かぶ一片であること、またそれがそれ自身のうちに閉じられると同時にその海の無限に投げ出されていること、そしてコロニーの庭に隠されているもっとも貴重な財宝をさがしながら、港から港へ、針路から針路へ、売春宿から売春宿へそのコロニーに行き着くまで航行することを思い浮かべてみればよい。ボートが 16 世紀から現在にいたるまで、われわれの文明化にとって経済発展の偉大なる道具であっただけではなく、同様に想像力の偉大なるたくわえであったことの意味を理解するだろう。船はヘテロトピアなみのすばらしさである。ボートなしの文明化においては、夢は枯渇し、スハイ活動は冒険にとってかわり、そして警察は略奪者にとってかわる。

(Foucault, 1986, p. 27)

「ヘテロトピア」という概念が、ボートのように「移動する理論」となるならば、それはわれわれの「批判的想像力」(Gregory, 1993, p. 254) のたくわえともなるだろう。

IV

「フーコーが地理学的言説に積極的に(登場ではなく)引用され始めるのは」(大城, 1996)、まさにこのディシプリンにおけるポストモダンの興隆と期を一にしている。あるいは、当時の書物を繙けば明らかのように、引用文中の「フーコー」を「ヘテロトピア」に置き換えて、それがまるでポストモダンの潮流のついでやってきた漂流物のごとく、これは拾いものばかりに地理学者がとびついた(遅ればせながら筆者もその一人ではあるのだが)と勘ぐってしまいたくなるような奇妙な現象も起きていた。つまり、ほぼ同時期に出版され、しかもどれもが「ポストモダン」を唱った英語圏の書物のなかにそれぞれ違ったかたちでヘテロトピアへの言及がなされていたのである。すなわち、Edward Soja の『*Postmodern Geographies*』(1989 年)、David Harvey の『*The Condition of Postmodernity*』(1989 年)、Philip Cooke の『*Back To The Future*』(1990 年)⁹⁾

において。

地理学の文献のなかでのヘテロトピアの引用は、ふたつのカテゴリに分類できる。ひとつは、ポストモダン都市あるいは脱工業化社会のうちにヘテロトピア的な場所を見いだす（あるいはそれにあてはめる）思潮。もうひとつは、ヘテロトピアを抵抗の可能性をはらむ拠点とみなす思潮である。以下、この2点にしぼって現状を簡単に展望したうえで、ふたたびフーコー自身の言説へと立ち返ることにしたい。

地理学へのヘテロトピア概念の導入に先鞭をつけたのは、やはりなんといっても『*Postmodern Geographies*』で「ミシェル・フーコーのアンビヴァレントな空間性」に言及した Soja である（1989, pp. 16-21）。Soja は、この論考のなかでとくに自身の議論を展開しているというわけではなく、「Of Other Spaces」におけるヘテロトピアのエッセンスをうまいこと引き出すにとどまっている。しかし、ここでの引用がこの後他の文献で繰り返し利用されることになったことを考えれば、かれの「再発見」の影響は大きいと言わざるをえない⁹⁾。また同書の第9章には、1986年に発表した「Taking Los Angeles apart」という論文を、サブタイトルを「some fragments of a critical human geography」から「towards a postmodern geography」に変えたうえで所収しているが（pp. 222-248）、そのなかで「外側の空間 outer space」（ヘリコプターに乗って上空）から見たロスアンゼルス市の「都市景観」を、後者ではヘテロトピアの景観と短絡的に読み替えている（p. 240）。

Harvey と Cooke は両者ともに、『言葉と物』（p. 16）からヘテロトピアを引用しそれを「おびただしい可能な秩序の諸断片が集まった空間」と位置づける McHale（1987, p. 18）にならったものである⁷⁾。Harvey は、フーコーがヘテロトピアを「数多くの断片的な可能世界からなるひとつの不可能な空間における共在」あるいは「相互に並置され重ねられる比較不可能な空間における共在」とみなしていた、としている（Harvey, 1989, p. 48）。また、Cooke は、「境界や中心、あるいは内部の規則性を確定できない空間」こそがヘテロトピアであるとし、またそれはモダニズム的な論法をつきくずすような「あれかこれかではなく、あれもこれもという世界」、「不条理の空間」であると位置づける（Cooke, 1990, p. 100）。多少ニュアンスの違いはあるものの、モダンとは異質な（あるいはそのマージナルな）論理

を有する場所と理解している点では一致していると言える。むしろソースの違いがどうであれ、ポストモダンの文脈でヘテロトピアをとりあげた、あるいはポストモダンな状況をヘテロトピア的とみなした三者の共通性に注目すべきであろう。

近年の研究には Soja 流にポストモダン都市空間を読むためにヘテロトピアを援用している例がいくつか見られる（例えば、Soja, 1995; Lees, 1997）。そして、それをもっとも総括的に強調したのが Relph（1991）である。かれは、ポストモダンの景観や場所をもつ現実の地理を表わすのにふさわしい単語をひとつ選ぶとするならば、それは「ヘテロトピア」であると断言する。かれはそれを「共通の論理を見いだすことが不可能なくらいに差異のある事象をはらんだ多くのロカリティをもつ空間、あらゆるものがどういふわけか場違いであるような空間」であり、かつ「おびただしい可能な秩序の諸断片をきらめかせる、法則も幾何学もない…混乱」（フーコー, 1974, p. 16）を構成するものと位置づけている。さらにさきの三者については「興味深いコメントではあるのだが、わたしにしてみればそれらはけっして充分ではない」と述べ、一歩ふみ込んでつぎのように述べる。

ヘテロトピアは、われわれの時代・われわれの思想の痕跡を帯びた地理である——言ってみれば、それは多元論的で、カオス的で、細かにデザインされてはいるが、普遍的基礎あるいは原則を欠いており、たえまなく変化しつつ、没中心的な情報のフローに関係づけられる。つまり、それは人工的であり、かつ根深い社会的不平等によって特徴づけられる。それは、景観や地理的パターンに関するほとんどの慣習的な考え方に疑いをかける。それはまた地図作成者への真の挑戦でもある。

(Relph, 1991, pp. 104-105)

つまり Relph にすれば「ポストモダニティはヘテロトピア的なものの普遍化」（Gregory, 1994, p. 151）ということになる⁸⁾。

しかし、Soja（1989）らの現象へのあてはめから得られる「ポストモダンの地理」に対しては、その著書全体に「幾何学的想像 geometric imaginary」が浸透しきっていること（モダニストとしての Soja?）、生活世界なき（人間のいない）空虚な景観論であることを、Gregory が批判的に検討している（1994, pp. 257-313）。むしろ、概念的—隠喩的な道具としてではなく、社会

的他者性への問いとして、現実の空間・場所・地理への感性あるいは態度を「フーコーの地理学」に見いだす Philo (1992) の主張のうちに、もうひとつの（「真の」）ポストモダン地理学の可能性があるのかもしれない。ちなみに、Philo (1992) は、ヘテロトピアを「空間的諸関係をとおして相互に関係づけられまたすべてがごちゃ混ぜな実体のある事物（人間、動物、森、川、丘陵、建物、道、鉄道：リストに終わりは無い）でいっぱい世俗的な空間（「外的空間」）」と位置づけて、概念的—隠喩的な「分散の空間」の感覚ではなく、実質的な地理に対するより現実的な感覚をここに見いだしている (pp. 157-158)。そしてかれが主張するように、こうしたあらゆる事物で充填された「世俗的な空間」のうちに、フーコーが（そしてわれわれが）どのように、「われわれを引っかきまわし悩ます…異種混交的な空間」の豊饒な内容を認識するのが問われるべきであろう。このことは、後述する「鏡のヘテロトピア」につながる議論でもある。

ここまで見てきた論点とは多少異なるが、文化地理学という言説空間にヘテロトピアを適用した例もある。それは、刺激的に「内戦のあとで」と題された James Duncan の 1980 年代に焦点を合わせた文化地理学史である。Duncan (1994) は、1970 年代後半・1980 年代に教育された若い世代の文化地理学者が 1950 年代・1960 年代に教育された古い世代の文化地理学者の立場=姿勢を激しく攻めたとする世代間的特質をもった 1980 年代初頭から文化地理学の内部で繰り広げられた闘争を「内戦」と位置づけている。その戦後に文化地理学というサブ・ディシプリンが、サウアーやパークレー学派の伝統そしてカルチュラル・スタディーズなどを持ち込んだ英国の「新しい文化地理学」と相まって「相容れない言説の場」としてのヘテロトピアに変容してきたことを強調する。そのうえで、文化地理学を積極的に「認識論的なヘテロトピア」とみなし、差異を称揚するサブ・ディシプリンとして再構築することを提言しているのである。比較的野放図に適用してはいるものの、そのサブ・フィールドの現状は的確に指摘されているようにおもわれる。ただし、「あれもこれも」という状況を、そしてさらなる差異化を称揚することが今後の指針になっているかは疑問である。

つぎに、もうひとつの流れ、つまり Harvey を中

心とした「抵抗」の可能性をそれに見てとる論考について他の関連する議論にひきつけて考えてみたい。

近著『*Justice, Nature, and the Geography of Difference*』(1996) のなかで Harvey は、ヘテロトピアを「ラディカルな行為のための領野」(p. 45)、「社会的管理の外側にある自由の空間」(p. 230)、あるいは「監視の道具性の外側にある空間」(p. 263) と『*The Condition of Postmodernity*』における位置づけよりは単純なかたちでより積極的にとらえなおし、われわれの現在の空間秩序（ここではド・セルトーの空間論がイメージされている）とは異質なそしてそれへの「抵抗」の形態をはらむ「解放の空間」・「対抗空間」へと練り上げることを目指している。また、Ruddick (1990) は Harvey (1989) の解釈を敷衍して、ホームレスがド・セルトーのいう日常的な戦術的实践から創り出す空間をヘテロトピアとみなし、やはり社会的な管理に対する抵抗の可能性を探究している。しかしながら、この両者の間にはヘテロトピアの位置づけにはっきりとした違いがあることをみてとることができる。

例えば、ド・セルトー (1987, pp. 24-28) は、Harvey のいう「社会的管理」や「監視の道具性」、つまり、Gregory の「権力の目」の議論にひきつけて言うならば (1994, pp. 401-406)、日常生活を植民地化する手続きを「戦略」と呼び、つぎのように定義する。それは「ある意志と権力の主体が、周囲から独立してはじめて可能になる力関係の計算（または操作）」である (p. 100)。そしてその戦略は、例えば一望監視的な装置が作用するような「ある権力の場所（固有の所有地）をそなえ、その公準に助けを借りつつ、さまざまな理論的場（システムや全体主義的ディスコース）を築きあげ、その理論的場をとおして、諸力が配分されるもろもろの場所全体を分節化しようとするような作戦」である。この空間的实践はその対象である具体的空間を管理可能な支配的空間に改変する。さらに、ド・セルトーがそれと対置するのは、戦略が作用する空間（具体的空間）を再度領有しようとするもののやりかた、そのおびただしい日常的な実践であり (Gregory, 1994, pp. 302-303)、それは「戦術」と呼ばれる領域にあたる。「戦術」とは「自分のものをもたないことを特徴とする、計算された行動」であり、その空間はもっぱら「他者の空間」でしかない——けっして固定されることなく位置の自由がきき、不可視なものである。つ

まり戦術は、戦略が生産する権力の空間を、利用し、あやつり、横領することしかできない。それは、権力の監視内での行動であり、管理された空間内での動き——つまり、植民地化される具体的空間にそなわる微細で日常的な手続き——であり、そうした監視のもとにおかれながら、秘密裡に、そして散在しつつゲリラ的に、ふと状況が隙を与えるならば、ここぞとばかりに好機をとらえる技である。

Ruddick (1990) が注目するのは、まさにこの「戦術」の領域である。社会的管理の外側にはなく内側に、そして、監視の道具性の外側にはなく内側に、日常実践によって創出される「自由の空間」こそがヘテロトピアだということである。この論点は、あの「権力の目」の図式にみられる Gregory (1994) の立場にちかいかいと言えるだろう。もう一度その図式にあてはめて言うならば、抽象的空間によって植民地化される具体的空間とは日常生活の空間であり、それは「経済および国家によって枠付けられ、束縛され、植民地化される」(ルーチン的な空間的实践の) 領域であると同時に (p. 402)、「モダニティの疎外によって触れられていない(伝統的な)空間的实践の軌跡と記憶」(pp. 362-363) の領域でもある。そして Gregory 自身が強調するのは、具体的空間は抵抗やアクティヴな闘争を含む空間的实践や「対抗言説を生産し、オルタナティブな空間的想像を創出する表象の空間の起点である」こと——ゆえに、具体的空間はいまだに「主体の空間」であり、抵抗の可能性をはらんだ使用価値の空間——なのである。つまり、日常生活の空間のうちに抽象的空間のヘゲモニーに対抗するポテンシャル(示差的空間を生産する役割)はある (Lefebvre, 1991, p. 52, 383)。

ルフェーブルは、示差的空間が抽象的空間に固有な矛盾から産出されると考える。…差異の生産者としての身体は——リズム、身ぶり、想像力をとおして——差異に固有のものである。「対抗空間の追求」は、空間の領有や新しい空間形態——例えば、愉しみの空間——を創出する力の行使をとおして、個人的身体そのものから起こらねばならない、とルフェーブルは言う。土地開発業者、都市フランナー、そして国家のアジェンダへの抵抗をとおして、そしてヘテロトピア・「ヘテローロジック」をとおして、均質化された領域の周縁に差異がたもたれ生起するのである。

(Stewart, 1995, p. 615)

Ruddick (1990) にあってはむしろ示差的空間がヘテロトピアと指定されているようにおもわれるが、Stewart は示差的空間がヘテロトピアを起点として生産されることを強調している⁷⁾。しかし、この議論ではヘテロトピアがまるでそこここに存在する所与のものとして考えられているようにおもわれるし、Harvey (1995) が指摘するように、Gregory (1994) の議論においても、抵抗がいかにかして可能になるかについては回答が用意されていない。また、Ruddick とは異なり、「社会的管理」あるいは「監視の道具性」の「外側」にヘテロトピア(「自由の空間」)を位置づける Harvey にしても、それがどのように生産されるのかについては明確に述べていないのが現状である。

V

前章で検討した Soja や Relph の議論では、あまりにヘテロトピアという場所の異種混濁性が強調されているのに対して、Harvey らの議論では抵抗の可能性にその要点がある。しかし、ここに見てきたどちらのヘテロトピア観にも、それが「反一場」であるという認識が欠けているのではなからうか (Gregory, 1994, p. 151)。フーコーはヘテロトピアについてこう述べている。

おそらくすべての文化、すべての文明において、なにか反一場のようなもの、ある種の効果的に規定されたユートピアのようなものであり、そのなかには…現実の場所——たしかに存在する場所、まさに社会の基体のうちに形成されている場所——もある。

(Foucault, 1986, p. 24)

しかしながら、

この種の場所はあらゆる場所の外側にある、たとえその位置が実際に指し示されようとも。

(Foucault, 1986, p. 24)

Harvey がヘテロトピアを「外側」に位置づけるのはここに拠っているわけであるのだが、ヘテロトピアが「反一場」であるという論理を一貫させるためには、必然的に「あらゆる場所の外側」になければならないはずであるし、それはフーコー特有の「外の思考」に起因しているとも考えられる。このことは先述のとおり、『言葉と物』でのヘテロトピア概念にも共通している

と言えるだろう。そうすると、むしろヘテロトピアの異種混濁性を強調するよりも、フォーコーの論考は、タイトルにあるとおり、「他なる空間」をめぐるなされていることにより注意をむける必要がある。

そこで、ヘテロトピアを「絶対的な《他者＝他なるもの》」(Genocchio, 1995, p. 36) と考えるとき、ドゥルーズとガタリはその本質をうまくつかみ出して、われわれに示してくれる。

他者は、…ひとつの可能的世界として、ひとつのおびえさせる世界の可能性として現れる。この可能的世界は、リアルではない、あるいはまだリアルになっていない、がしかし、それでもなお存在するのだ。その可能的世界は、その世界の表現のなかでのみ存在するひとつの表現されたものである。他者とは、さしあたって、そのように存在するひとつの可能的世界のことである。そしてこの可能的世界もまた、可能的であるかぎりにおいて、それ自身においてひとつの固有なリアリティをもっている。可能的であるかぎりでの可能的な世界に或るリアリティを与えるためには、表現者が「私はこわい」と語ったり言ったりすれば、(たとえそうした言葉が嘘であっても) それだけで十分である。

(ドゥルーズ・ガタリ, 1997, pp. 25-26)

「Of Other Spaces」と『言葉と物』におけるヘテロトピアの共通する可能性は、このドゥルーズとガタリの言質に集約されるのではなからうか。さらにここで提示された「可能的世界」としての「他者」を前提とすれば、唯一「他なる空間」への言及がなされたヘテロトポロジーの6番目の原則を容易に理解することもできるだろう。

この〔ヘテロトピアの〕機能はふたつの究極的な極の間で展開する。その役割はどちらも、すべての現実空間を露わにする幻想の空間、つまりその内部に人間生活を区分するあらゆる場をよりいっそう幻想的に創り出すことにある…。あるいはそれどころか、それらの役割は、他なる空間、つまりもうひとつの現実空間を、われわれの空間がらちかかっていて、不完全なつくりであり、ごちゃ混ぜであるのとおなじように、完全に、正確に、なおそのうえうまいこと整えられたものとして創り出すことにある。この後者のタイプは、幻想のヘテロトピアではなく、代償のヘテロトピアであろう。

つまり、「反一場」としてあらゆる場所の「外側」に生起する「空間」とは「幻想のヘテロトピア」でありかつ他者としての「可能的世界」であり、それが「現

実空間を露わに」しつつ「よりいっそう幻想的に」創り出す「他なる空間」こそが「代償のヘテロトピア」、つまりわれわれのもうひとつの「現実空間」なのである。あるいは、他者としての「幻想のヘテロトピア」とは「ひとがひとつの世界から他の世界へ移り行くための条件」である(ドゥルーズ・ガタリ, 1997, p. 28)、と言い換えることもできよう。その「移り行く」プロセスをドゥルーズは「生成」と呼んでいた。「新しいもの、それはアクチュアルなものである。アクチュアルなものは、わたしたちがそうであるところのものではなく、わたしたちがそれへと生成するただ中にあるところのもの、すなわち《他なる》もの、わたしたちの〈他に一生成すること〉である」(1997, p. 74) 10。

しかし、フォーコーはこの「他に一生成すること」を「Of Other Spaces」においては比喩的にべつの仕方で示唆していた。かれは、ユートピアとヘテロトピアの間にはある種の共通の経験があることを指摘しながら、(ラカン的に?) それは「鏡」であると言う 11。

この鏡は、結局のところ、それが没場所的な場所であるがゆえに、ユートピアである。その鏡のなかで、わたしはわたしがいないそこ、つまりその表面の後ろに開かれている非現実の、ヴァーチャルな空間にじぶん自身を見る。わたしはあそこにいる、あそこはわたしがいないところ、わたし自身の可視性を自分に与える影のようなもの、わたしが不在であるそこにじぶん自身をわたしにみさせてくれる影のようなもの、そういうのが鏡というユートピアなのである。だがその鏡が現実存在している限りにおいてそれはまたヘテロトピアなのであり、そこではわたしが占めている位置にある種の反作用をおよぼす。その鏡のある位置からだと、わたしがじぶん自身をそこに見るがゆえにわたしがいる場所に自分の不在を、わたしは発見するのである。いわばわたしに向けられるこのまなざしから、つまりそのガラスのもう一方の面であるこのヴァーチャルな空間の基礎からはじめることで、わたしはわたし自身へともどる。つまり、わたしはじぶんの視線をじぶん自身へとふたたび向けはじめ、そしてわたしがいるそこにじぶん自身を再構成しはじめ。鏡はこの点でヘテロトピアとして機能する。つまり、それは、わたしがガラスのなかでじぶん自身を見る瞬間にわたしが占めているこの場所を、それをとりまく空間すべてと結びついた絶対的な現実なものとし、またそれが知覚されるためにはそちらにあるこのヴァーチャルなポイントをとお切り抜けなければならないがゆえに絶対的な非現実なものともするのである。

(Foucault, 1986, p. 24)

鏡のユートピアとは鏡のなかの空間が「想像」であるかぎりにおいて「非現実」的であるのだが、鏡が物質的であり、また「その人自身に物質的現前を与え、その分身を、つまりこの『他なる』空間からその不在——と同時に固有性——を呼び出す」(Lefebvre, 1991, p. 185) がゆえに、それはまたヘテロトピアでもあるのだ。つまり、ユートピアとヘテロトピアの混合した経験とは、鏡が客体の領域で「現実」であるとき、鏡のなかの空間は想像上のもの imaginary であり、反対に「生きる身体 living body」においては、その効果が現実であることをさすのである (Lefebvre, 1991, p. 182)。ここで起こる事態を、ルフェーブルは次のように説明する。

その対称がそのなかに映し出されるがゆえに、エゴはその「他者」のなかに自身を「認識」することになるが、「他者」はたんに反転した像 image として「エゴ」を表象しているにすぎないのだから、それは実際にはそれと一致しないのである。そこでは、極端な差異を生成する反映として、エゴの身体を幻影 will-o'-the-wisp にとりつかれるものへと変える反復として、左が右となるのだ。(Lefebvre, 1991, p. 185)

つまり、「《同一者》(エゴ) と《他者》はそれゆえ互いに向かい合い、想像できるかぎりにおいて、同一であること以外は、絶対的に異なっているし、つまりその姿は厚みをもっておらず、重さもない。右と左は鏡のなかでは反転しており、エゴはその二重を知覚する」こととなるのである (Lefebvre, 1991, p. 182n)。フーコーはこの鏡像との関係を、ルフェーブルとは(そしてラカンとも)ちがったかたちで¹²⁾、「模像 simulacre」として捉えている(フーコー, 1990b, p. 84)¹³⁾。

けれどもたぶん、simuler という語の語源になおいっそうの注意をはらわねばなるまい——模する simuler とは「いっしょに来る」こと、自己と時を同じくして、自己からずれて在ることではないだろうか？ 自分自身がこの別の場所に在ること、誕生の場ではなく、知覚の出生地にではなくて、尺度なき隔たりをおいて、もつとも近接した外側に在ることではないだろうか？ 自己の外、自己と共に、遠方の数々が交錯しあう、一個の〈と共に〉のうちに在ること。

(フーコー, 1990b, pp. 84-85; 強調は引用者)

鏡のヘテロトピアは「尺度なき距たりをおいて」、「自己からずれて在ること」を可能にするというのである¹⁴⁾。本文にたち返って言えば、その「ヴァーチャルな空間」を起点にして「じぶん自身を再構成」(＝主体化)するとき、個人は自己をとりまくすべての空間と結びつきながら「他なる空間」や主体性を創りあげる可能性をもっているのである。ルフェーブルが指摘するように、鏡という「特殊な場所」、その「面白さと重要性は、『主体』の(あるいはエゴの)姿 image を『主体』(あるいはエゴ)に映し返すという事実ではなく、むしろそれが身体に内在する反復(対称)を空間のなかへ拡張するという事実由来する」(Lefebvre, 1991, p. 182n)。

ヘテロトピアの異質性や異種混濁的な状態をとりあげる原則よりも、ヘテロトピアの可能性をより積極的に捉えるためには、むしろこの「他なる空間」が生成する起点となる、「幻想のヘテロトピア」と「代償のヘテロトピア」のあいとその関係に注目する必要があると考える。

「ヘテロトピア」とは「ある種の効果的に規定されたユートピアのようなもの」なのだから、文中のユートピアを「幻想のヘテロトピア」と読み替えることもできる。それはつねに、いま自分がいるこの場所を露わにしそして反作用をおよぼす「反-場」であるので、この鏡の空間における主体と他者の生動的関係は、「幻想のヘテロトピア」と「代償のヘテロトピア」の弁証法的関係と措定することもできるだろう。ここから立ち上がる問題構成は、空間と身体にかかわるものである。つまり「Of Other Spaces」で構想されたミシェル・フーコーの「空間」論は、「身体の空間」から「空間-内-身体」への移行を論じたルフェーブルの思想 (Lefebvre, 1991) と密接に関連する、「自己の構成における社会的空間の生産」(Gregory, 1997) 論とも言えるのである。

「他なる空間」をめぐる新たな問いの構成は、「空間の生産」論へと開かれるにちがいない。

註

- 1) アンビヴァレントなこの空間性に対する各論者の位置どりはふたつのカテゴリーに分類できるようである (Geno-

cchio, 1995, pp. 35-36; Lees, 1997, p. 321)。一方は、ディストピア dystopias 的な空間を「デカルト的空間の雑種だと確信」する「憂鬱と悲運」の懐疑論者グループであり、他方は、「積極的・建設的な介入」の可能性にこだわる肯定派グループである。前者にはボードリヤール (1984)、Virilio (1986)、Harvey (1989)、そして Jameson (1984) らが、後者には Foucault (1986)、ブルデュー (1989, 1990)、ド・セルター (1987)、ドゥルーズ・ガタリ (1994) らが含まれるという。

- 2) 本稿でとりあげるフーコーの著作すべてを参照するにあたり、ジル・ドゥルーズ『フーコー』(1987)、ジル・ドゥルーズ「装置とは何か」(1997)、ドゥルーズ・ガタリ『哲学とは何か』(1997)、桜井哲夫『フーコー——知と権力』(1996)、そして中山 元『フーコー入門』(1996)を参考にすることを感謝をこめてあらかじめここに記しておく。また、より一般的なフーコーの空間論と地理学については大城 (1996)を参照されたい。
- 3) フーコーの公式全集『*Dits et écrits*』第4巻の360に所収された。
- 4) フーコーは『言葉と物』のなかで、中世以降の西洋のエピステーメを考古学的に分析することで、西洋の歴史には大きく分けて3つのエピステーメがあることを示している。すなわち、中世・ルネサンスのエピステーメ、17世紀半ば以降(「古典主義時代」)のエピステーメ、19世紀初頭から始まる近代のエピステーメである。つまり、「Of Other Spaces」の冒頭でたどられたこの西洋の「空間の歴史」は、それぞれのエピステーメによって特徴づけられていたのである。
- 5) 本書の副題は「Modernity, Postmodernity and Locality」である。
- 6) Soja とはべつのかたちで、空間性を探究する Massey (1992)も、直接的にヘテロトピアに言及してはいないものの、「Of Other Spaces」からフーコーの空間観を引き合いに出している。
- 7) イタロ・カルヴィーノのすばらしい詩的な小説『見えない都市』は、フビライ・ハンに仕えるマルコ・ポーロが訪れた数多くの都市について語って聞かせる形態をとっているが、マルコ・ポーロによって語られる都市は「見えない」どころか光彩に満ちあふれた可視的な都市(フィクション!)である。McHale (1987)が問題化するののは、このマルコの語る都市の「おびただしい比較不可能な、そして相互に排除するような世界を適合させる空間」である。無論、かれはこの種の「空間」をヘテロトピアとみなすのではあるが、フビライ・ハンがあるときマルコ・ポーロにむかって、「そちの申す都市など存在はせぬ。恐らくはただの一度も存在したことなどはなかったのだ。もちろん、もはや存在することもない。なぜそのような気慰めの作り話を面白がっておるのだ? わしにはよく分かっておる、わが帝国は沼のなかの骸のように腐りはてている」と言うとき、ホストモダニスト・フィクションの問題はべつのとこ

ろ(マルコが語る都市/空間の存在論的問題とフビライの反駁/空間の認識論的問題)、つまり「他なる空間」を語ることの可能性、にあるようにおもわれる。

- 8) Relph がディズニースペースを想定して言及していることからすれば、かれ自身の現代社会に対するイメージは、ヘテロトピアよりはむしろ Buck-Morss (1995) が言うところのディストピアにちかいかもしれない。また、Relph がヘテロトピアを『言葉と物』から引用していることを考えれば、どちらのテキストから出発してもホストモダニにゆきついてしまうところに、それらの議論になんらかの認識論的な問題が含まれているようにおもわれる。また、やはり1989年に出版された『*Postmodernist Culture*』のなかで Connor は、Relph と同様にホストモダニ的な世界のイメージを『言葉と物』におけるヘテロトピアとして捉えている。
- 9) ルフェーブルの空間論においても、都市空間を構成する3つの次元を同定するために、「ヘテロトピア」という語が「イソトピア」、「ユートピア」とともに用いられている。これら3つの語はつぎのように定義される。「イソトピア: 類似した機能あるいは構造をもった同質的空間」、「ヘテロトピア: 対照的な空間、時間として重要なものになる反発力としばしば極端になる緊張のたむけ」、「ユートピア: 他所と生起しないもの、とくに現われていると同時に不在でもある知と権力の場」(ルフェーブル, 1975, p.89; Lefebvre, 1991, pp. 163-164, p. 366 も参照)。
- 10) ドゥルーズ・ガタリ (1997, pp. 160-163) も参照。
- 11) 本稿の冒頭で紹介したように、「ヘテロトピア」という概念は「公園」の定義を「鏡」とイメージすることから生まれたものである。また、以下の訳文は、ヘテロトピアの説明に先立って記された「ヘテロトピア」の定義でもある。
- 12) ルフェーブルは、ラカンにとって「鏡は、身体を断片へとばらばらにしてしまう言語の傾向に対抗するのに役立つが、実践的でありなかつた象徴的(想像的な)空間においてそしてその空間をとおして超越へと導くこともなく、それはエゴを堅い形態へと凍てつかせてしまう」(Lefebvre, 1991, p. 185n)と批判する。ルフェーブル自身は、その鏡像が「主体としてのわたしの統一性を構成するからではなく、それがわたしであるところのものをわたしであるところのもの、の記号へ改変する」(Lefebvre, 1991, p. 185)ことを重視する。ラカンの鏡像論と、フーコーおよびルフェーブルの空間と身体に関する議論は、今後、より詳細に検討する必要があると思われる。
- 13) フーコーはこの「模倣」という語をクロソフスキーから得ており、「アクタイオンの散文」(1964=1978c)でより詳細な議論を展開している。
- 14) このことは「外の思考」(1966=1978b)では「《自己の外》に出ること」と位置づけられ、「外の体験」と呼ばれている。「おのれ自身から離脱することを可能してくれる」(フーコー, 1986, p. 15)哲学の構想の先駆けとなる思考とも言えるだろう。

文献

- アルチュセール, L. 著, 今村仁司訳 (1995): 『哲学について』 筑摩書房, 234p.
- 大城直樹 (1996): 文化=社会地理学とフーコー——方法論的現状についての素描——. 人間科学, 2, pp.125-141.
- 桜井哲夫 (1996): 『フーコー——知と権力』 講談社, 342p.
- ソレルス, P. 著, 岩崎 力訳 (1966): 公園. 同『公園』新潮社, pp. 43-162.
- ドゥルーズ, G. 著, 宇野邦一訳 (1987): 『フーコー』 河出書房新社, 228p.
- ドゥルーズ, G. 著, 財津 理訳 (1997): 装置とは何か. 現代思想 25-3, pp. 68-77.
- ドゥルーズ, G. ・ガタリ, F. 著, 宇野邦一訳 (1994): 『千のプラトー』 河出書房新社, 656p.
- ドゥルーズ, G. ・ガタリ, F. 著, 財津 理訳 (1997): 『哲学とは何か』 河出書房新社, 318p.
- ド・セルトー, M. 著, 山田登世子訳 (1987): 『日常の実践のホイエティック』 国文社, 452p.
- 中山 元 (1996): 『フーコー入門』 ちくま新書, 238p.
- フーコー, M. 著, 神谷美恵子訳 (1969): 『臨床医学の誕生』 みすず書房, 316p.
- フーコー, M. 著, 渡辺一民・佐々木 明訳 (1974): 『言葉と物——人文科学の考古学——』 新潮社, 413p.
- フーコー, M. 著, 豊崎光一訳 (1975): 『レーモン・ルーセル』 法政大学出版局, 261p.
- フーコー, M. 著, 伊藤 晃訳 (1978a): 権力の眼: 「パノプティック」について. エヒステーメー, 1月号, pp. 156-173.
- フーコー, M. 著, 豊崎光一訳 (1978b): 外の思考. 同『外の思考』, pp. 9-65.
- フーコー, M. 著, 豊崎光一訳 (1978c): アクタイオンの散文. 同『外の思考』, pp. 107-138.
- フーコー, M. 著, 八束はじめ訳 (1984a): 空間・知そして権力. 現代思想 12-12, pp. 84-97.
- フーコー, M. 著, 豊崎光一訳 (1984b): ニーチェ・フロイト・マルクス. エヒステーメー, 11-0, pp.
- フーコー, M. 著, 田村 俣訳 (1986): 『性の歴史II 快楽の活用』 新潮社, 331p.
- フーコー, M. 著, 田中寛一訳 (1987): 汚名に塗れた人びとの生活. 現代思想 15-3, pp. 78-92.
- フーコー, M. 著, 福井憲彦訳 (1988): 空間・地理学・権力. アクト 4, pp. 44-57.
- フーコー, M. 著, 田村 俣訳 (1990a): 自己のテクノロジー. 同『自己のテクノロジー』 岩波書店, pp. 15-64.
- フーコー, M. 著, 豊崎光一訳 (1990b): 距たり・アスペクト・起源. 同『作者とは何か?』 哲学書房, pp. 73-116.
- フーコー, M. 著, 清水 徹訳 (1990c): 空間の言語. 同『作者とは何か?』 哲学書房, pp. 117-138.
- フーコー, M. 著, 山形頼洋・鷺田清一ほか訳 (1996a): 主体と権力. 同『ミシェル・フーコー: 構造主義と解釈学を超えて』, pp. 287-307.
- フーコー, M. 著, 山形頼洋・鷺田清一ほか訳 (1996b): 倫理の系譜学について. 同『ミシェル・フーコー: 構造主義と解釈学を超えて』, pp. 308-342.
- ブルデュー, P. 著, 石井洋二郎訳 (1989, 1990): 『ディスタンクシオン: 社会的判断力批判』 藤原書店.
- ボードリヤール, J. 著 (1984): 『シミュラクルとシミュレーション』 法政大学出版局, 220p.
- ルフェーブル, H. 著, 今井成美訳 (1975): 『空間と政治』 晶文社, 200p.
- Buck-Morss, S. (1995): The city as dreamworld and catastrophe. *October*, 73, pp. 3-26.
- Connor, S. (1989): *Postmodernist Culture: An Introduction to Theories of the Contemporary*. Blackwell, Oxford.
- Cooke, P. (1990): *Back to the Future: Modernity, Postmodernity and Locality*. Unwin Hyman, London.
- Duncan, J. (1994): After the Civil War: Reconstruction Cultural Geography as Heterotopia. Foote, k., Huggill, P., Mathewson, K., and Smith, J. (eds): *Re-reading Cultural Geography*, pp. 401-408.
- Foucault, M. (1986): Of other spaces. *Diacritics*, 22, pp. 22-27.
- Genocchio, B. (1995): Discourse, discontinuity, difference: the question of other spaces. In Watson, S. and Gibson, K. eds. *Postmodern Cities and Spaces*, pp. 35-46.
- Gregory, D. (1993): *Bloody Theory. Environment and Planning D: Society and Space*, 11, pp. 253-254.
- Gregory, D. (1994): *Geographical Imaginations*. Blackwell, Oxford.
- Gregory, D. (1997): *Lacan and Geography: the Production of Space Revisited*. Benko, G. and Strohmayer, U. (eds): *Space and Social Theory*, pp. 203-231
- Harvey, D. (1989): *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*. Basil Blackwell, Oxford.
- Harvey, D. (1995): Geographical Knowledge in the Eye of Power: Reflections on Derek Gregory's *Geographical Imaginations*. *Annals of the Association of American Geographers*, 85(1), pp. 160-164.
- Harvey, D. (1996): *Justice, Nature and the Geography of Difference*. Blackwell, Oxford.
- Jameson, F. (1984): Postmodernism, or the Cultural Logic of Late Capitalism. *New Left Review*, 146, pp. 53-92.
- Lees, L. (1997): Ageographia, heterotopia, and Vancouver's new public library. *Environment and Planning D: Society and Space*, 15, pp. 321-347.
- Lefebvre, H. (1991): *The Production of Space*. Blackwell, London.
- Massey, D. (1992): Politics and space / time. *New Left Review*, 196, pp. 65-84.
- Philo, C. (1992): Foucault's geography. *Environment and Planning*

- D: *Society and Space*, 10, pp. 137-161.
- McHale, B. (1987): *Postmodernist Fiction*. Methuen, London.
- Ralph, E. (1991): Post-modern geography. *The Canadian Geographer*, 35(1), pp. 98-105.
- Ruddick, S. (1990): Heterotopias of the homeless. *Strategies*, 3, pp. 184-202.
- Soja, E. (1986): Taking Los Angeles apart: some fragments of a critical human geography. *Environment and Planning D: Society and Space*, 4, pp. 255-272.
- Soja, E. (1989): *Postmodern Geographies: Reassertion of Space in Critical Social Theory*. Verso, London.
- Soja, E. (1995): Heterotologies: a remembrance of other spaces in the Citadel—LA. In Watson, S. and Gibson, K. eds. *Postmodern Cities and Spaces*, pp. 13-34.
- Soja, E. (1996): *Thirdspace: Journeys to Los Angeles and Other Real-and-Imagined Places*. Blackwell, Oxford.
- Stewart, L. (1995): Bodies, vision, and spatial politics: a review essay on Henri Lefebvre's *The Production of Space*. *Environment and Planning D: Society and Space*, 13, pp. 609-618.
- Virilio, P. (1986): The Overexposed City. *Zone*, 1/2, pp. 15-31.
- Watson, S. and Gibson, K. eds. (1995): *Postmodern Cities and Spaces*. Basil Blackwell.

補論

フーコーは、1982年に行なわれたラビノウとのインタビューのなかで²⁾、空間の重要性を指摘する質問に対して、つぎのような興味深い発言をしている。

その通りです。空間はいかなる形の共同生活においても基礎的なものですし、空間はどのような権力の行使においても基礎的なものなのです。そういえば、私は1966年に建築家のグループによって私が当時「ヘテロトピア」と呼んでいたもの、すなわち互いに異なった、もしくは正反対ですらあるような機能をもつある定められた社会的空間のうちに見出される単一の諸空間、の研究に勧誘されたことを覚えています。

(フーコー, 1984a, pp. 94-95)

この発言はいったいどのような文脈でなされたのであろうか。インタビューの冒頭では、都市に固有の「空間的な問題」(例えば、疫病の流行、都市騒擾、「貧民」)をいかに対処すべきかという目的性をもった「統治の技法」について述べている。これは、従来が分析してきたマイクロ権力に対してはマクロ権力と

呼ぶことができるものであり、『性の歴史』第1巻の時点での構想に定位すれば「統治性 governmentality」にかかわるものと言える。この冒頭の発言をきっかけとして、さらにフーコーは、空間と権力/抵抗の問題についてもたびたび言及することとなる。例えば、「抵抗」については、「あるシステムが如何に恐ろしいものであるにしても、抵抗や不服従そして反対党を組むことの可能性はいつでもあるものであることを考慮に入れておかなくてはなりません」(フーコー, 1984a, pp. 88-89)と述べているし、「自由」についても、きわめて概略的ではあるのだが、以下のように位置づけている³⁾。

人間の自由とは、それを保証しようと意図された制度=施設や法によっては決して請け負われないものです。これが、ほとんどすべての法や制度が転覆され得ることの理由であり、それは両義的であるからではなく、単に「自由」とは実施されるべきものであるからなのです。…自由の遂行を保証することはものの構造に内在し得るものではないのです。自由の保証とは自由なのです。…もし、自由が効果的に遂行されている場所があるとすれば、そして幾つかは実際あるでしょうが、それはものの秩序に拠ってそうなのではなく、またしても自由の実践に拠ってそうであることが見出されるはずです。

(フーコー, 1984a, p. 89)

ここでの発言は、「自己のテクノロジー」論(1982=1990a)ではっきりと示されたように、「いかに個人が自分自身に働きかけるかの歴史」を問題としていた時期のものであり(1990a, pp. 17-21)、抵抗や自由に関する発言もそうした文脈で理解する必要がある。このインタビューのなかでも実際に、自己のテクノロジー論が結実することになる『快楽の活用』と『自己の配慮』についても予告されていた。やはり、この2冊の書物に「建築的なもの」があるのかとこだわるラビノウの質問に対して、フーコーはつぎのように答えている。

何も全くなかったとおきましよう。しかし興味深いことは、帝政ローマにおいては、売春窟、歓楽街、犯罪地区といったものがあり、また公共的ともいってよい歓楽の場、つまりは浴場もまたあったという事実です。浴場は極めて重要な歓楽と遭遇の場であり、ヨーロッパからは徐々に消滅していったものです。あまり語られることはないのですが、中世においても浴場はいまだに男と女、また男と男、女と女の遭遇の場でありました。語

られ、非難され、かつまた実践されたもの…人々は好きな時にそこに出かけ、ぶらつき、互いに引っ掛け合い、楽しみ、食い、飲み、論じたのです。

(フーコー, 1984a, pp. 93-94)

はからずもここで語られている「徐々に消滅していったもの」——「売春窟」と「浴場」——とは、まさにかつてフーコーがヘテロトピアと呼んだ空間である。そしてここでのヘテロトピアとは「自由の実践に拠って」創出された空間である。

そこにつくられ得るような無限定性的実践をもつコミュニティを想像してみましょう。それはまたしても自由の場所となることでしょう。私の考えでは、人々による自由の効果的な実践と社会的諸関係の実践、そして彼らが己れ自身をその中で見出す空間的な配分を分離しようとするならば恣意的となってしまうのです。もし分離してしまえば、理解は不可能となります。各々は互いに相手を通してのみ理解し得るのです。

(フーコー, 1984a, p. 90)

本章の冒頭での発言は、「自由」や「抵抗」にふれつつ来るべき著作に関連した発言のなかから、1967年当時の「ヘテロトピア」概念をふと思い出したフーコーのこぼれ話だったのである。つまり、「ヘテロトピア」という概念が、「自由の実践」によって創出される空間として、フーコーの最後の領域にぼやけながらそしてただの一度だけ再登場したとも言えよう。フーコーはさらに、売春窟と浴場の「社会性」が異なることを強調するなかで、「この〔浴場のもつ社会性の〕新しい形はおそらくもう一度出現しうるでしょうが」と言葉をささむかたちで、含みをもたせたあいまいな発言をしているが³⁾、この最後の領域では「主体(化)」をより積極的に位置づける必要がある。フーコーは、カントに反駁するようにつぎのように述べている(1983=1996a)。

おそらく今日の主要な目的は、われわれが何者であるかを発見することではなく、いまあるとおりのわれわれを拒むことであろう。個別化であると同時に全体化でもある近代の権力構造のこの種の「二重拘束」^{ダブルバインド}を排除するために、われわれが何者たりうるのかを想像し、構築しなければならない。

現代の政治的、倫理的、社会的、哲学的課題は、国家や国家の諸制度から個人を解放しようとするのではなく、国家と国家に結合している個別化の類型から自分た

ちを解放することである、ということ結論としたい。われわれは数世紀にもわたって自分たちに強いられてきたこの種の個別性を拒否することをつうじて、新しい主体性の形式を創りあげねばならない。

(フーコー, 1996a, p. 296; 強調は引用者)

「新しい主体性の形式を創りあげ」ること、つまり「支配に抵抗しうる《主体性の産出》」(ドゥルーズ, 1997, p. 75)は、「この一連の研究は私が予想してきた以上に手間どってしまい、すっかり別のかたちになっているように思われる」(p. 9)という巻頭言をもつ『快楽の活用』(1984=1986)では、「生存の美学」あるいは(ある実践の総体)としての「生存の技法」と位置づけられていた。「それは熟慮や意志にもとづく実践であると解されなければならない、その実践によって人々は、自分に行為の規則を定めるだけでなく、自分自身を変容し個別の存在として自分を変えようと努力し、自分の生を、ある種の美的価値をにやう、また、ある種の様式基準に依る一つの営みと化そう」とする努力のことである(1986, p. 18)⁴⁾。おそらく「自由の実践」あるいは「生存の技法」によって創出される主体の空間は、まさに「生活のうちで最も強烈な地点」であり「その力強さの集中する地点とは、まさしく生活が権力と衝突し、これと苦闘し、その力を利用しようとするかまたはその畏から逃れようとする場所」(フーコー, 1987, p. 82)となるにちがいない。こうした場所と主体のアクチュアリティ、「他なるもの」への生成としての主体化、このことを問うことは「まさに、フーコーがかれに続こうとする者たちに残した基本的な仕事」(ドゥルーズ, 1997, p. 71)なのである。しかし、このことは本論で述べたとおり、「鏡のヘテロトピア」のなかですでに構想されていたことでもある。

ところでフーコーは、『快楽の活用』が当初の予定からすれば「すっかり別のかたちになって」しまった理由を、みずからをその仕事へと「駆り立てた」「好奇心」にあるとしてつぎのように述べているくだりがある。

その好奇心というのは、知る価値があることを吸収しようとするたぐいのものではなく、おのれ自身から離脱することを可能にしてくれるような好奇心なのである。…人生には今考えているやり方とは違ったやり方で考え、今見ているのとは違ったやり方で認識することが可能なかどうか知ろうという問題が、これからもつづけて物

事を考慮したり、あるいは考察してゆくためには不可欠だという時がやってくるものなのだ。…哲学、ここでわたしは哲学という活動のことをいっているのだが、もし、それが、思考自身についての思考を批判する仕事ではないのだとしたら、今日、哲学とは何だろうか？ もし、哲学が、すでに知っていることを正当と認めさせるかわりに、今とは違ったやり方で考えることが、どのように、どこまで可能なのか知ろうと企てないのなら、哲学とは何だろうか？

(フーコー、1986, pp. 15-16)

まるでここには、「今考えているやり方とは違ったやり方で考え、今見ているのとは違ったやり方で認識することが可能なのか」、と（ヘテロトピアとしての？）鏡のまえで自問し哲学を実践しているフーコーがいるように、わたしには思えるのである。

- 1) 文化人類学者であるラビノウがこと執拗に建築への質問を繰り返したことにより、フーコーは「Of Other Spaces」でとりあげた事例を（おそらく無意識のうちに）提示している。
- 2) 「自由」と「主体」をめぐるアルチュセールのイデオロギー論（1995, p. 163-162）も参照されたい。ただし、フーコー自身は系譜学の3つの領域（真理との関係・権力の場との関係・倫理との関係）に主体を定位して探究している（フーコー、1996b, p. 319-320）
- 3) おそらく、1980年以降にかれが足繁くかよったカリフォルニアのゲイ浴場の体験にもづく発言だろう。
- 4) また、フーコーが「ブルックハルト以来、生存のこの技法、この美学の研究は全くおろそかにされた、と思うのは不正確であるにちがいない。ベンヤミンの『ボードレール』研究を想起すること」（1986, p. 43）と述べてベンヤミンに言及したのは、ただこの時だけであることにも注意しておきたい。ベンヤミンの「ボードレール」研究、すなわちパサーージュ論に見いだされる「生存の技法」がいかなるものかは、今後検討すべきテーマであるとおもわれる。

註

- * 文献は本論の文末に一括して掲げた。